

ぼくらが非情の大河をくだる時

一幕一場

——新宿薔薇戦争——

清水邦夫

〔登場人物〕

詩人

兄

父親

便所に群がる男たち

# 1

深夜。

都内の孤独な公衆便所。

背後の通りを時々走り去る車のヘッドライトの光が、夜の闇の中に便所を灰白く浮き上げ  
せる。

そこは、男たちが男たちを求めて集まるといふなまめかしい噂が流れている場所でもある。

いきなり一人の男が走ってくる。

脇目もふらず便所に飛び込み、身震いしながら放尿。

と、また一人の和服の女が小走りにやってきて男便所へとび込む。

おどろく放尿中の男。

だが女（実はオカマ）少しも騒がず、男の隣に立つと着物の前をガバツとひろげて放尿を

はじめ。

女の視線、男の顔から局部へと絶え間ない愁波を送る。

男、必死に視線をはずし、チャックもそこそこに去る。

女、がっかりした風情で、カツラをとって頭に風を入れながら去る。

無人の便所。

ヘッドライトの光。

少年が一人、かけ込んでくる。

不意にきんかくしに顔を突っ込んだかと思うと、激しく号泣しはじめる。

夜の闇に響く少年の号泣……、と、前の棚の上に誰かが置き忘れたらしい紅い薔薇の花束があるのに気づく。

それをとりあげ、軽くキスすると、急にゲラゲラ独り笑いして、ふざけたように花弁をちぎって便所のあちこちに撒き散らす。花がなくなってしまうと、ポイと花束を投げ捨て、ポケットに手を突っ込んで去ってしまう。

再び無人の便所。

どこかで、ギターの音が聞え出す。

詩人（実は弟）が現われる。

スコップを背負ってる。

便所に入らず、便所の外部をまるで巨大な彫刻を愛撫するかのようになめまわす。

詩人

なんて予感に充ち充ちた便所なんだ、このさりげないたたずまい、かすかにただよなつかしい臭気、それでいて傲慢なまでの自己主張、そして日々あくこともなくくりかえす大衆との対話……いやいや詩人と時代のむすびつきとは、時代の反映者たることではない。

詩人の役割とは時代の見えない部分と結びつくことだ。真の時代を発見することだといってもいい。え、文句あるか！ 夜は偽れる盛装をする。街もしかり。便所もしかり。かの詩人はいった、満開の桜の木の下には一ぱいの死体が埋っている。そしてまたまた、かの詩人がいった、夜の公衆便所の下には一ぱいの死体が埋っている……

詩人、こんどは便所の中へ入っていき、壁や柱やきんかくしをゆっくり愛撫しはじめ。二人の男が音もなく便所に入ってくる。

と、つづいて一人、また三人、また二人と……あつという間に便所の中に十数人の男がいつぱいになる。

詩人、ギョツとして周囲を見回す。

男たち、無言。

ある緊張。

互いにさりげなく視線を絡め合い、反応をたしかめ合っている。

詩人、ここそ逃げ出そうとする。

男たちの視線がさつと集中する。

詩人、身動きがとれない。

詩人　にいさーん！　どこにいるんだよお、にいさーん！

あと去りして、大便所の一つにとび込んでドアをしめる。

その時、白木の棺桶をかついだ二人の男がやってくる。

闇の中に、まるで白木の棺桶だけが移動しているようだ。

男たち、一齐にギョツとしたように眺める。

白木の棺桶の方も、ギョツとしたように止まる。

沈黙の対峙。――

次の瞬間、男たち、あつという間に、音もなく姿を消していく。

白木の棺桶をかついだ男二人、便所に近づく。

男二人（実は父親と兄）男たちが消えたあたりをうかがう。

やがて、ホツとしたように棺桶を下ろす。

父親　なんだ、あの連中？

兄　（したり顔で）真夜中のパーティーさ。

父親　公衆便所でか。

兄　驚いたといえ、むこうの方が、もっと驚いたはずだぜ。

父親　（棺を見やりながら）冷蔵庫やテレビを運んでるとわけが違うからな。

大便所の方で音。

父親　誰かいる……

二人、および腰になりながら便所の中をうかがう。

兄　奴だ、たしかさつきこつちの方で声でした。

大便所のドアがあき、詩人の方も外をそつとうかがう。

兄 トオルか……トオルだろ、兄さんだよ。

詩人 奴等はどうした。

兄 奴等って？

詩人 今いた連中だ。

兄 みんな消えちまったよ。

詩人 本当か、騙すんじゃないだろうな。

兄 お前を騙すもんか。

詩人、誰もいないのをたしかめると、出てくる。  
いきなり父親の首をしめ上げる。

詩人 くそ！ このインチキおいぼれめ！ またおれを檻の中へ入れようと思って手をまわし

たんだろ、死ね！

父親 た、たすけてくれ。

兄 やめろ！

兄、必死に詩人をおさえつける。

兄 違うよ、お前の思い過ごしだ！

詩人、ケロッとして立ち上る。

詩人 悪かったな、パパ。

父親、首筋をなでながら、

父親 もう、うんざりだ……

詩人 うんざり？

父親 (逃げ腰) わしはもう疲れた。

詩人 棺桶がそんなに重いのか。

父親 (兄に) お前はいい子になって、勝手にこの気狂いに合わせてろ、わしは明日から絶対ごめんだ。

詩人 絶対？ 絶対とは真理のあの絶対性をさすのか、え、パパ。

父親 どうにでも好きなように解釈してちょうだい。

詩人 絶対の真理はたいまつだ。しかも巨大なたいまつだ。だからわれわれは目を細めて、そのそばをさけて通りすぎようとするのだ。己れが火傷をひたすら恐れるがゆえに。

兄 火傷はわれわれの肌にケロイドをつくるばかりではなく、われわれの魂にも醜いケロイドをつくる。

詩人 にもかかわらず、人間は小さな振子だ、涙とほほえみの間の小さな振子……

兄 詮じつめれば、くそまみれの消化器と性器の結合体。

詩人 よせつたら、詩人にむかって言い草だ(急に怯えたように)まさか腹をたててるんじゃないだろうな、おれなにか気にさわったことをやったかい、え、にいさん。

兄 (いきなり殴りとばす)

詩人 (思わず殴り返す) 悪かったよ、にいさん、ぼくは反射神経が優秀すぎるんだ、もう一度



兄 殴ってくれよ。  
もういい。

詩人 たのむよ、にいさん、もう一度殴って！  
父親 お前もはつきりいつてやったらどうだ、もううんざりたつて。

詩人、ふたたび父親にとびかかる。

詩人 黙れ！ 死ね！

父親、必死にもがきながら、

父親 だ、だれか来る！

詩人、ぎよっとして手をとめる。

詩人 だだだ、奴等か、きつと奴等だな、にいさんたのむよ。

詩人、棺桶のフタをあけて、隠れてしまう。

父親、すかさずフタの上に腰をおろす。

誰もこない——。

父親 作戦成功だ。

兄 奴を騙すなんてよくないよ。

父親 わしは疲れたよ、シンソコ疲れた、五十面をさげてこんなことを……え、考えてみろよ、

便所の下に死体が埋ってるわけがないだろ。

兄 奴は詩人だからな。

父親 バカいえ、ただの気狂いだ、お前が甘やかすから、奴の症状はますます昂じてきやがった。兄 別に甘やかしてたわけじゃない……ただ奴の中では、おれは、昔のおれのままなんだ。

父親 男らしくたくましい兄さんか。

兄 そうさ、男らしくて、たくましい……

父親 お前はいいよ、それにくらべてわしなんか、くそみそだ、実の子でなかったら今頃……

兄 今頃なんだい。

父親 お前……

兄 一年前みたいに、もう一度首をしめてみるかい。

父親 やめてくれ、その話は。

短い沈黙。

父親 あの時、荒縄じゃなくてやつぱり革バンドを使えばよかったんだ。

兄 だからおれは、あんたにバンドをよこせていったんだ、そしたら、あんた、ズボンが落ちるからいやだって。

父親 わしはね、下半身丸出しのそんなかつこうで、実の子を殺したくなかったんだ。お前こそだいたい力の入れ方が弱かったんだ、ボクシングの選手だったくせに。

兄 おやじさんが電車でもひっぱるようなバカ力を入れすぎたんだ、だからおれはひっぱられて、つんのめって……首をしめるには、つまり平均した力つてものが必要なんだ、アルキ

メデスもいつてるだろ。

父親 アルキメデス？

棺桶。カタカタいい出す。

兄（ハツとして） 空気孔はあけたのか。

父親 いいや。

兄、はっと腰を浮かす。

父親、逆にフタを体でおさえこむようにする。

兄 おやじさん……

父親 いいから。

兄をも強引に腰を下ろさす。

父親 わしたちがなにをしてるっていうんだ、ただ腰を下ろしてるだけだ。

兄 ただ腰を下ろしてる？

父親 そうだ、ただ、腰を下ろしてるだけだ。

兄 でもよ……

父親 静かな晩だな、ほら見ろ、星が光ってる……

不意に棺桶が静かになる。

重い沈黙。

兄 ……なんてことだ、あんたのせいだ。夜な夜な棺桶をかついで走りまわるくらいなんでもなかつたんだ。体をきたえるトレーニングだと思えばどうってことなかつたんだ。(すすり泣く)

父親 そら涙はよせ、お前は奴のために悲しんでるんじゃない、自分が昔の自分に戻れないことをくやんでるだけだ、くだらん妄想の中に生きようなんて考えは、これでおさらばしろ。

兄 畜生！ あんたは奴ばかりじゃなく、おれまで殺そうってんだ。  
父親 バカ、落着くんだ！

二人、腰を浮かして睨み合う、と、その時、棺桶のフタが勢よくあけられる。  
ひっくりかえる二人。

詩人、半身を起す。

詩人 夢を見ていた……ひどく短くて難解な夢だ、うなされてなかつたかい、おれ。

父親と兄は顔を見合わず。

兄 そういえばほんの少々……

詩人 でも結論は出た、知識とは何か！ 階級社会があらわれて以来、世界にはただ二種類の知識しかない。ひとつは階級闘争の知識といい、ひとつは生産闘争の知識という。自然抖

学と社会科学が、この二種類の知識の結晶であり、哲学は自然に関する知識と社会に関する知識の総括なのだ。(突然客席にむかって)これ以外にどんな知識があるか。え、これ以外にどんな知識があるか。聞いてみる!

父親 (絶望し) ああ、またはじまった。

詩人 なにっ。

父親 奴等はいっちまったよ。

詩人 本当か、誦すんじゃないだろうな。

父親 でも、あの様子じゃ、また戻ってくるんじゃないかな。

詩人 蛇のように執念深い奴等だからな、今夜はどんな変装してた?

父親 変装?

兄 (父親をつついて) もちろん変装していたさ。

詩人 あててみようか……都清掃局の役人。

兄 それぞれ。

父親 実によく当るじゃないか。

兄 都内の公衆便所の清潔度について二、三質問していった……

詩人 待てよ、今日は何曜日だ?

父親 水曜日……かな。

詩人 水曜日なら都清掃局の役人じゃない、泣きぬれたガードマンのはずじゃないか。

父親と兄、困惑。

兄　　そういえば、なんとなくそのような雰囲気……

詩人、不意に地面に這いつくばる。

詩人　薔薇だ、見ろ！　紅い薔薇だ！……

父親と兄も見る。

紅い薔薇が血のようにこぼれ落ちている。

詩人　ここだ、とうとう捜しあてた。にいさん、ここだよ。この公衆便所の下にこそ薔薇の群

島のような死体がいっぱい埋まっているんだ。

父親　ちえっ、なんてついてないんだ。こんなもの、酔っぱらいが落してつたにきまつてる。

詩人、便所に入りながら、

詩人　にいさん、きてみろよ。おれはなんとなく予感してたんだ。シート、ほら聞えるだろ。

兄　（耳をすますが）!?

詩人　聞えるじゃないか、地を這うようなすすり泣き……

兄　誰の？

人　（苛々して）少年たちだよ、愛に破れた……

兄　愛に破れた？

詩人　そうだよ。彼等は愛に破れた、薔薇戦争に破れた無名戦士なんだ。

父親　（いつのまにかポケットトウイスキーを出して飲んでる）薔薇戦争？　太平洋戦争なら知って

るが……

詩人 ほら、見えてきた……見えてきたぞ、薔薇の群島だ……ほら、にいさん、薔薇の群島が  
あんなにひろがっている……

兄 しかしお前……おれにはなにも……

詩人 いいんだ、気にしなくてもいい。にいさんは詩人じゃなくてスポーツマンだ。頭でなく  
て筋肉をつかう方だからな……さ、掘ろう。

兄 掘る？

詩人 薔薇の群島を掘り起すんだ。

父親 冗談いうな！ そんなことしたら公共物破損でつかまるだけだ。

詩人 公共物破損？（不意に遠い過去をさぐるような表情）公共物破損……

父親、突然闇をすかす。

父親 シーツ。

兄 もうその手は古いよ。

父親 バカ、本当に誰かくる。

詩人、再び棺桶へとび込もうとする。と、一瞬早く、父親と兄が棺桶を持ち上げる。ひっ  
くりかえる詩人。

詩人 くそ。おれのバリケードをどこへもっていくんだ！

二人、そんなことに構ってられない。

父親 どうしよう。

二人、棺桶をかかえて便所にとび込もうとするが、

兄 男か女か。

父親 女のような男のような。

兄 どっちか早く決めてくれ。

父親 あ、シャツが花もよう。

兄 女だ。

父親 と思いきや男だ。

二人、棺桶をかかえて女便所にとび込もうとする。あわてているために仲々入らない。

兄 畜生！

力まかせに棺桶をぶち込む。

轟音！

便所の前方の一画が崩れ落ちる。

白煙。

奥の大便所の一つのドアがバターンとあき、裸の男が二人、ズボンやシャツをかかえてとび出してきて、気が狂ったように走り去る。



男  
棺桶……

こわれたコンクリートの裂け目から、白い棺桶が半分、不気味に突き出し出している。やってきた花もよりのシャツの男、そっと棺桶に近づく。近眼らしい。棺桶に顔をすりつけるようにして見る。首をかしげてポケットからタバコを出して火をつける。そのとたん、

脱兎のごとく走り去る。  
父親と兄、茫然と立っている。

と、詩人の姿が見えないことに気づく。キョロキョロ探す。  
その時、崩れた瓦礫の下から、詩人がふらふら立ち上る。  
なぜか、棺桶のフタががらと落ちた。

詩人、ハッと怯えたように便所の階段の隅へ逃げる。  
背後を車が通る。ヘッドライトの点滅。  
浮び上る詩人の顔。

兄 お前……  
詩人 はい！

あわてて、ひざをきちっとそろえて、あたかも訊問を受けるかのようにかしこまる。  
そして、突然闇に向って答えはじめる。

詩人

はい……はい……はい、夕御飯ですか、夕御飯はおいしゅういただきました。とくにあの丸干しは好物で……脂もよくのつており、焼けぐあいも程よくおいしゅういただきました。あの……お茶もいただきました。ちよつと、いえほんのちよつとぬるめでしたが、ぼくの口は荒れているものですから、あれ位がちよつとよく、本当においしゅういただきました。ただかすかに消毒薬の臭いが……全然気にするほどのものではないのですが、あれはクレゾールでしょうか、はい、はい、もちろんそのあとでこの間差し入れていただいたキヤラメルで口直しをいたしました。キヤラメルはとってもおいしゅうございますが、時折この、上あごと下あごにくつついてしまいとても困難します。ですが今朝発見したところによりますと、こう、噛む瞬間、というより噛んだ瞬間、噛んだ側の顔面の筋肉を一瞬こう歪めますと、上にも下にもくつつかず、なんとというか二度目のソシヤク運動を難なくこなすことが出来ます。なんなら今ここで皆さんに実験してみせても……（急にかたくなになる）名前はふかおとおる、年齢二十一歳、……（苛々して）名前はふかおとおる、年齢二十一歳、それ以上なにもいうことはありません、（せせら笑う）バカな。にぃさんがそんなことを……諷そうとしたってムリですよ。はっきりいっておきます。その一件については何も話すことはありません。隠しているとかが隠していないとかの問題じゃない。話すことの必然性をぼくは認めません、（苛々して）あなたたちは同じことを何度いわせるんだ。ぼくは話さない。話すことを断固拒否する……（首を激しくふる）ダメです、ぼくは沈黙を守る、それがぼくの正義だ、……黙否！ いくらおどかしたってムダだ。ぼくにとつて不利であろうがなからうが関係ない！ ぼくはぼく自身に対して厳粛な決定を下したのだ。ぼくは話さない、ぼくは話さない、ぼくは話さない、ぼくは話さないっ！

詩人、激しく頭をかかえこむ。  
兄、そっと背後にまわる。

兄 (優しく) 今日の訊問はおわりだ。

詩人、うつろな眼をあげる。

兄 今日の訊問はおわったんだ。

父親も近づく。

父親 今だ、おとなしいうちに連れて帰ろう。

兄と父親、詩人の両腕を支え、そっと連れ去ろうとする。  
と、詩人いきなり二人を突きとばして、便所の中へかくれる。

父親 お前……

詩人、便所のかげからどなる。

詩人 誰だ、貴様たち。

兄 淮だつて？ お前のにいさんとパパだよ。

詩人 ウソを吐け！ パパとにいさんだつて？ ・ 笑わせるな、変装してることばわかってんだ。  
次は都清掃局の役人だつていうんだろう。

父親 どうなっちゃったんだ。

兄 まだ頭が混乱してるんだよ。

父親 いくらなんでもわしたちの顔を忘れるなんてひどいじゃないか、今日の夕方だって、三人そろってビールを飲んで食事をしたっていうのに。

詩人 どこで!?

父親 もちろんわしたちのアパートだよ、ほら、お前たちのおふくろのでかい仏壇がある茶の

間で……

詩人 ここは茶の間か？

父親 なんだって？

詩人 (苛々して) ここは茶の間かってきいてるんだ、どこにおふくろの仏壇がある？

兄 ここはお前、公衆便所だよ。

詩人 そらみろ、貴様たちの話は矛盾だらけだ。父子おやこだったら茶の間にいるのが当然じゃない

か。それを、こんな時間どうして公衆便所にいるんだ、変じゃないか、常識を超えている

ぞ!

兄 (父親に) なんとかいってくれ、おやじさんが変なこというからすつかりこんがらかったじやないか。

父親、棺桶の所へ走っていく。

父親 よく見ろ！ これはなんだ。

詩人 箱らしいな。

父親 ただの箱じゃない。

詩人、そつと近づく。

詩人 (驚く) 棺桶!?

父親 そりゃないだろう。自分で作らしといてびっくりするなんて。お前がパパとにいさんに作らしたんだ。日曜大工で棚しか作ったことのないわしらに、どうしてもといって、こんなバカげたものを……。

詩人 バカげたもの? 棺桶がどうしてバカげたものなんだ、死者をとむらう神聖なものだ。

それより棺桶がうす汚れた公衆便所にあるという状況の方がずっとバカげてるぞ。むしろなにやら作爲的な危険な状況と比べていい、なにかたくらんでるな、貴様たち。

父親 冗談いうな、みんなお前がいい出したことなんだ。

詩人 いやいや、なにかたくらんでる、貴様たちのやりそうなことだ。こりゃ畏だ、まさに狡こつ

獯かにしかも隠微にしかけられた畏だ。日常の中にグロテスクな非日常を持ちこみ、情操ゆたかなるわれわれ詩人のイメージを攪乱し、たくみに敗北へみちびこうというたくみな畏だ。え、凶星だろう、騙されるものか、とつとと失せろ!

詩人、ふたたびかくれる。

父親 まるで天の岩戸だ、なにかつていうとかくれちゃう、もう勝手にしろ。

兄 勝手にしろって、放つとくつもりかい。

父親 だつてお前、奴の方で父子だつて認めないんだ、これ以上なんて主張する必要があ

る？

兄 おれは奴を見捨てない。

父親 ふん、以前は見捨てたくせに。

兄 やめろ！

父親 ええカッコさらすな。それがお前たち世代の悪いところさ。見捨てないだと？ 冗談っぽい、ただあきらめ切れないだけなんだ、奴の狂った頭の中にある昔の自分のええカッコをな。

兄 そうさ、その通りだ。

父親 いい加減にしろよ。

兄 いやだねえ、あきらめないね、この夜の公衆便所めぐりがつづくかぎり、おれは奴にとっ

ちやヒーローなんだ。そう、簡単にあきらめてたまるもんか。

父親 くそ！ こいつまで頭がヘンになってきやがった。

兄、便所に近づく。

兄 おい、トオル……出てこいよ、にいさんだ。(不意にボクシングの構えをする) さ、こい、昔よくやったじゃないか。(軽くフットワーク)

便所、返事なし。

兄 こわいんだな、おれの右ストレートがこわくてかくれてるんだな、ワンツー、ワンツー、ジャブ、ジャブ、ジャブ、ジャブ、(シャドウボクシングをつづける)

父親（ふてくされてポケットトウイスキーをのみ出す）ムダだ、そんなことやったって、蛙の面に小便だよ。

兄、構わずシャドウボクシングをつづける。

兄 ワンツ、ワンツ、卑怯だぞ、お前、出てきて正々堂々とたたかえ！

兄、シャドウボクシングをしながら、父親を蹴とばす。

兄 パパ、酒なんかないで、いつものようにレフリーをするんだ、おい、トオル、パパがレフリーをしたがつてうずうずしてるぞ！

父親 冗談いな。

兄 ワンツ、ワンツ、ジャブ、ジャブ、ジャブ……

便所のかげから詩人がそつとのぞく。

詩人 おにいちゃん。

兄、ハッとふりむく、詩人、ボクシングの構え。

詩人 ホントにおにいちゃん？

兄、あわてて構えなおしながら、

兄 そうだよ、おにいちゃんだよ。

詩人 急にどうしてそんなにふけちゃったんだ？

兄 ふけた？

詩人 そこにいる汚ないおいぼれは誰だい？

父親 そりゃないだろう、パパだよ。

詩人 違う、やっぱりおれを騙そうとしてるんだ、どうせ変装するんなら、もっとうまく変装しろ。

詩人、再びかくれる。

父親 畜生！ なんだか本当に変装してるような気分になってきた。しかし一体、このわしに変装しているわしはどこのわしなんだ。

兄。そんな父親をひきずり出す。

父親 なにをする……

兄 いいから打ってこい！

父親 わしはレフリーだぞ。

兄 つべこべいわずに、さあ。

父親、思わずジャブの応酬。

兄 そうだ、その調子。

父親 本気でやるなよ。



二人、フックの応酬。

次第に父親、軽いフットワーク。

父親　なんだか本当に体が軽くなってきたぞ。

父親、調子にのってパンチの連打。と、兄の強烈なカウンター。父親ふらつく。

父親　本気でやるなっていったろ。

兄　奴がのぞいてるぞ、さ、もつと打ってこい。  
父親　くそつ。

父親、必死になってかかっていく。

兄の連続的な強烈パンチ。

父親、ノックダウン。

兄、すかさず詩人の方に向って、

兄　さあ、こい！

詩人、思わずとび出していく。

パンチの応酬。

兄　おぬし、出来るな……でもまだまだ、左のガードが甘いぞ……ワンツーワンツー！！

兄、余裕を持ってたたかう。

と、詩人のパンチが一発入る。

兄、思わず本気で打ちかえす。決まる。

詩人、殺気だつ。

打ち合いは次第に凄惨な感じになっていく。  
壁に追いつめられる兄。

容赦なく殴りかかる詩人。

詩人　くそ、死ね！　死ね！　死ね！

兄、顔面から血をふき出し、ついに昏倒。

詩人、血だらけの自分の手を勝誇ったように見つめる。

と、きつと客席の闇の方をふりむく。

詩人　誰だ、そこにいるのは……奴等の仲間だな、おれを檻の中にとじ込めようたってそうは  
させないぞ。(血染めのこぶしを見せて) 見ろ、おれはもう隠れないぞ、だからそっちも隠れ  
ないで姿を見せろ、はつきり正体をさらせ！……なぜだ、なぜ姿を見せない、おれがこう  
して姿を見せてるのに……たのむから姿を見せてくれ！

詩人、ひざを突き地面をたたく。

次第に興奮がさめてくる。

詩人ふと頭を上げる。

詩人 笑ってるな、誰かが笑ってる……風か……いやおにいちゃんだろ、おにいちゃんに決つてる……どこに隠れてるんだ、おにいちゃんまで奴等のマネをすることはないだろ……どこだ、ぼくをひとりにはしないでくれよ、仲間はずれにしないでくれ、ぼくだってもう大人なんだ、……わかつてるよ、今にぼくの隙をついてうしろから突きとばすんだろ、でなきや突然、首にナワをかけて猫みたいにぶらさげるんだ、それともいつかみたいに河へ突きおとすのかい、あれだけはやめてくれよ、ぼくは泳げないんだ、ほかのことだったらなんだって我慢するよ、だから仲間はずれにだけはしないでくれよ……

その時、兄、ふらふら立ち上る。

血だらけの顔。

詩人、ふりかえる。

詩人 おにいちゃん……

兄、ふたたびぶつ倒れる。

詩人、かけよって抱きおこす。

詩人 しっかりしろよ、おにいちゃん。

兄 大丈夫だ、これしき。

詩人 誰だ、誰がこんな目に合わせたんだ。

兄 (驚く) 誰がってお前……

詩人 奴等だろ、え、そうだろ、おにいちゃん。

一

兄 (仕方なく) そうさ、奴等だ。

詩人 畜生！ やっつけてやる、眼には眼をだ、どこへ逃げた？

兄 もういい。

詩人 よかあないよ、いつもにいきさんがいつてるじゃないか、やられたら、やっつけ返せ、たとえ一人でも戦え、小さな火でも燃えさかればいつかは野原を焼きつくすって。

兄 待て、おれはこういうことだっけって教えたはずだぞ。革命と革命戦争は進攻的であるが防禦もあれば後退もある、進攻のための防禦、前進のための後退、正面攻撃のための側面攻撃。

詩人 だから待ってっていうのかい。

兄 待つ、迎え撃つ、反攻する。ボクシングだっけって同じだよ、まさに必殺のカウンターブロー。

詩人 奴等は多いのかい。

兄 わからない、なにしろ不意を襲われたからな。

詩人 そうだと思つたよ、でなきゃにいきさんのことだ、敵の死体が一つや二つ……あ、死体。

兄 バカ。そりゃパパだ。

詩人 またよっぱらってる。起きろ。

兄 よせ、眠らせとけ。

詩人 でも、一人でも多く大衆を動員しろって、にいきさんがいつてたじゃないか。

兄 よく見ろ、そのパパに、おれたちと一緒にたたかう勇気があると思うか。やつはただのうす汚れた豚だ。

詩人 にいきさん、パパは何かたちのよくない夢を見てるんじゃないのか、涙流してる……

兄 おおかた小さな庭の夢を見てるんだろ。

詩人 小さな庭だつて？

兄 いつもバカの一つ覚えみたいにいつてたろ、小さな庭に小さな薔薇の花壇……

詩人 そうだ……想い出したぞ、いつもポケットにスーパースターだとかチャールストーンだとかサンシヨウバラだとかの種子を持ち歩いて……

兄 いつだかお前はパパを喜ばせようと思つて植木鉢を買つてきた、そしてパパの種子をこつそり植えたじゃないか。

詩人 芽が出ない……

兄 そうだ、いつになつても芽が出ない……

詩人 何日待つても芽が出ない……

兄 だまされていたんだ。

詩人 そう、パパはだまされてニセの種子をつかまされたんだ……

短い沈黙。

詩人 足音だ……

兄 ……風の音だ。

詩人 違う、足音だ。

兄 ……風の音だ。

詩人 風の音だ。

短い沈黙。

詩人 いつまで待てばいいんだ。

兄 不安なのか。

詩人 よせやい、もう子供あつかいはよしてくれ。

短い沈黙。

詩人 へんだな……いつかもこんなふう待っていた……たしかにいさんと一緒だ。

兄 (なぜかたじろぐ) おれど？

詩人 いったったかよく想い出せない……たしか誰かを待っていた……ぼくはひどく緊張してた……そのうちににいさんが臭いといい出した……覚えてるだろ、にいさん。

兄 (首をふる) 知らん。

詩人 でも、にいさんが臭いといい出したんだぜ、そして笑った、ゲラゲラあざ笑った、お前はやっぱり餓鬼だ……あの時のにいさんは残酷だった。緊張のあまりウンコをもらしたぼくを河へ突きおとした。このぼくが泳げないことを知っていたながら……でもぼくは笑おうとした、ムリして笑おうとした、何回も何回も頭から水につけられながら、ぼくは笑おうとした。なぜだかわかるかい。ぼくはにいさんに捨てられたくなかったんだ……

兄 もうよせ。おれはお前を見捨てたりしなかった。だから今もこうして一緒にいるんじゃないか。

詩人 わかってるよ、にいさんはおれを見捨てたりしなかった……でも、誰を待ってたんだろ。あの時、ぼくたちは誰を待ってたんだ。

兄 忘れた……みんな忘れた。

詩人 どうして？ ぼくは河へ突きおとされたりしたけど、決していやな思い出じやない……  
はつきりとは思い出せないがなにか楽しい……ひどく緊張した……そして、ひどく、ひどく、ひどく、ひどく……思い出せない、あの時、誰を待ってたんだ、なにが起ったんだ……  
兄 もうよせといつたらう！

兄、詩人を突きとばす。

詩人 にいさん……

兄 帰れ！ さつさと家へ帰れ！ お前なんかいると足手纏まといだ。邪魔なんだよ、迷惑なんだよ、とつとと失せろ！・ それともなにかい、このおれを助けようなんて大それたことを考えているのか。お前に一体なにが出来る。ええ坊や。お前になにが出来るかってきいてるんだ！

詩人 (打ちしおれて) ひどいよ、にいさん。

兄 甘ったれた声を出すな。そんなにおれに見放されなくなったら態度でしめせ。

詩人 教えてくれよ、ぼくはなにをやったらいいんだ。

兄 知るもんか。なにごとでも自分で判断して行動しろと教えたろ。

詩人 わからないよ。なんでもやるから、ねえ、にいさん……

兄 なんでもやる？ 本当だな、おれのためになんでもやるっていうんだな。じゃ馬になれ！

詩人 馬!?

兄 そうだ、馬だ。四つ肢の馬になれ。そら見ろ、出来ないだろ、子猫にも子猫なりのプライドがあるっていいたいんだろ。でもベートーヴェンだっていってろ。卓越した人間は苦

悩を通じて歓喜を受けとる。

詩人、突然、這いつくばる。

詩人 さあ、のれよ、にいさん。

兄 (たじろぐ) 冗談だ、よせ。

詩人 いいからのれよ。ぼくだってソロモン王のことばを思い出したんだ。人は名誉をうるに先だつて、苦痛を受けなければならぬ。

兄 もうよせつたら、おれが馬になる。

兄、這いつくばる。

詩人 にいさん……

兄 命令だ、お前がおれの上ののれ。苦悩は活動への拍車だ。そして活動のなかにのみ我々は、我々の生命を感じる。さ、のれ。

詩人、兄の背にまたがる。

兄、いきなり走り出す。

すぐ、へこたれる。

詩人 大丈夫かい。

兄 大丈夫だ。同志諸君、困難をおそれず、困難から逃げかくれせず、ついに困難を克服し、かつ困難を絶滅すべく……



あえなく転倒。

と、兄、むっくり体を起す。

兄 おれは駄馬だ、最低だ、屠殺場へつれていけ！

詩人 そんなこといったって、にいさん。

兄 いいから屠殺場へつれてけ！

と、自ら首に荒縄をまきつける。

兄 さ、ぐずぐずしないで、ひっばれ。

詩人、荒縄をひっばる。

兄、苦しそうにうめく。

詩人 いやだよ、ぼくが馬になるよ、殺される方がずっとラクだ。

兄 なに、殺される方がずっとラクだ？

詩人 そうだよ、ぼくを屠殺場へつれてって。

兄 弟の分際で生意気なことをいうな！ こんないい役を渡してたまるもんか、さ、ひっばれ。

カミュもいつてるじゃないか、生への絶望なしには生への愛はありえない。

詩人 ひどいよ、にいさん。

兄 もっとひっばれ！

詩人 (泣きながら) にいさんって、なんて残酷なんだ。

兄 (呻きながらも) ああ……絶望の中にひらめく焼けつくような快感……もつとひっぱれ、もつと……

荒縄が切れる。

もんどりうって倒れる二人。

父親が、キョトンと目を醒す。

父親 誰だ！ わしの薔薇の花壇を荒す奴は……

一瞬の静寂。

兄、むっくり体を起す。

兄 河だ……

詩人も体を起す。

詩人 河だって？

父親も一緒になって“河”を捜す。

以下、身振りで兄弟の話に合わせようとする。

兄 ほら、きこえるだろう、河が流れている……

詩人 (怯えて) ぼくは泳げないんだ。

兄 ざわめきだ……むこうの河岸でなにか人のざわめきがきこえる……

詩人 誰かが死んだんだ。

兄 誰かが死んだ？

詩人 ああ、なんて華やかな混乱なんだ……

兄 違う、あれはただの遊園地さ。

詩人 ただの遊園地？

兄 そう、人がいとしい我が子と遊び呆けてるただの遊園地……

詩人 悪くないじゃないか、おれたちもいこうよ。

兄 いやだねえ、遊園地の中で好きなのは噴水だけだ、しかも七色にかわるでかい噴水……

詩人 噴水のうしろには期待にみちた夕ぐれ……

兄 夕ぐれの下にはちっちゃな屋外舞台……

詩人 畜生……なんて華やかな混乱なんだ……

いつのまにか、二人立ち上っていた。そしていつのまにか、兄は腰と足で小さなリズムをとっていた。

兄 ワンツー、ワンツースリフォ、ワンツー。ワンツースリフォ……

詩人も、兄に合わせて、幻の屋外舞台で踊り出す。

点滅するイルミネーション。

二人、リズムをとりながら軽やかなステップ。

父親も、脇でいつのまにか、少しづれながら一緒にリズムをとり出していた。

三人、踊る。

いったんは、バカバカしい程の愉快な滑稽な踊りにのぼりつめて……やがてはたよりない踊りに変っていく。

と、いつのまにか十数人の男たちが、木蔭や便所の蔭や、あるいは便所の中からのぞいている。

三人、それに気づき出すと、踊りの動きは次第に小さくなり、ついには指を鳴らすだけに  
なってしまう。

男たちの、冷たく刺すような、それでいてどこかなまめかしい視線。

三人、思わず後退。

詩人 奴等だ……

父親 奴等？ あの人はお前、真夜中のパーティーでビールをのみすぎただけだ。

詩人 パパは知らないんだ、パパはいつも大事な時には眠りこけてなにも知らない、奴等だよ。

にいさんをやっつけたのは。

父親 お前、その血……わしが倒れてる間に起きたんだ。

兄 なんにも起らないさ……奴のパンチをしたたかくらっただけさ。

詩人 おれの？ どういう意味なんだ、にいさん。

兄 もう夢の遊びは終わったんだ。

詩人 夢の遊び？

兄、詩人の肩を抱く。

兄 冗談だったんだよ、おれたちが昔よくやったら、冗談っぽいって遊び。さ、鼻かんで……  
詩人 鼻なんかカンケイない！

兄 あの人たちもカンケイないんだ……奴等じゃない、あの人たち、おれたちと同じただの孤  
独な連中さ。

詩人 ウソだ！

詩人、とび出そうとする。

兄と父親、おさえつける。

詩人 離せ！ なぜなんだ、にいさんが待てというから待ったんだ、進攻のための防禦、前進  
のための後退、正面攻撃のための側面攻撃……みんなウソだったのか。あの時だ……

父親 あの時？

詩人 そうだ……想い出したぞ……あの時だ……ぼくはじっと待ってたんだ、柱の蔭で、太い

コンクリートの蔭で……ぼくは緊張のあまりウンコをもらしながらじっと待ってたんだ

……五時間も、そうだ五時間もあいだ……にいさんはいった……あわてるな、落着け、  
いいか失敗は許されなんだぞ、お前は右の脇腹を狙え、オレは左の脇腹を狙う、震える  
な、数を数えろ、羊の数を数えろ、どうだ、落着いたか、落着いたら自分の内部にむかっ  
て叫べ、自由の木は……自由の木は……

兄 自由の木は、ただ暴君の血を注がれる時にのみ成長する。

詩人　そしてにいさんは叫んだ、たいまつを燃やせ、おれたもの行為は、おれたちの燃やしたたいまつのは、新しい世代にひきつがれる……

父親　（ゲラゲラ笑い出す）とんだ茶番だ、ことはだけだったら、わしだっていくらでも叫んでやる。息子よ、わたしの二人の息子よ、未来は美しい、未来はバラ色に輝いてる。

詩人　黙れ、よっぱらい、ぼくは賭けたんだ、にいさんのことばに、にいさんのすべてに……ぼくは待ち切れなかった、ぼくはとび出した……ぼくはこわかった、でもぼくはとび出した……

詩人、二人の手をふりきって、便所の方へとび出していく。

父親　お前！  
兄　やめろ！

詩人の手にいつのまにか光るナイフ。

木立ちの蔭にいる一人の男の影に突進していく。

無言で消える影。

詩人、あわてて別の木立ちへ。

無言で消える影。

詩人、あわてて別の木立ちへ。

ふたたび影が無言で……

詩人、狼狽してふりかえる。

詩人　にいさん……

兄と父親、思わずすすきの蔭にかくれる。

詩人 にいさん……なぜ出てこないんだ、ぼくは右、にいさんは左だろ……にいさん！

いつものまにか男たちが、詩人をとりかこむように便所からあふれ出ている。

詩人、怯える。

男たちの無言で光る眼。

詩人 にいさん……助けてくれよ、助けてくれよ、助けてくれ！

その絶叫とともに、詩人、男たちのなかへ突っ込んでいく。

男たち、無言で体をひらく。

詩人、勢いあまって便所のきんかくしにつんのめる。

ふらふら立ち上る詩人、ふたたび反撃にうつろうとすると、男たち蟻のように群がる。

そして、あつという間に幾本もの手が伸びてきて、詩人のシャツやズボンをびりびりと引き裂く。

殆ど裸体に近い姿になる詩人の肉体……

男たち、淫らな呻き声をあげて、詩人を犯そうとする。

その時、兄がとび出してくる。

兄 待ってくれ！

男たち、ふりむく。

詩人 にいさん……。

兄 (男たちに) 離してくれ、たのむから、その男は頭がへんなんだ、気が狂ってる！ 気狂いなんだ！

詩人 なんだって？ このぼくが気狂い？

父親 そうなんだ、お前は狂ってる…… (男たちに) だからお願いだ、この子を見のがしてくれ！

詩人 ウソだ！ ぼくは狂ってなんかいない、にいさんなんてことをいうんだ……。ぼくは気狂いじゃない、ぼくは気狂いじゃない、ぼく……

この間、男たちは詩人の身体から離れて、無言でさーっと姿を消す。便所の中にポロ切れのように放り出されている詩人……

詩人 (泣きじゃくる) ひどいじゃないか、にいさん……あの時だつてそうだった、ぼくを気狂い扱い……ぼくがなにをしたっていうんだ、ぼくはにいさんのいう通りにやってきた、いつだって、どんな時だつてぼくはいつもにいさんの期待に答えようとがんばってきたんだ、それなのに、このぼくを気狂い扱い……裏切りだ、ひどい裏切りだ……なぜなのか答えてくれよ、にいさん…… (便所のくずれた壁を激しくたたきながら) ぼくにはわからない、ぼくにはわからない。

と、その時壁がくずれ落ち、白木の棺桶がかたむく。なかからザーツとこぼれるまっ赤な薔薇の花弁……。ヘッドライトの点滅。

静寂。



父親がふらふらと撒き散らされた薔薇の花弁に近づく。

父親 薔薇だ……薔薇の花壇だ、わしがずっと夢に見ていた小さな庭の薔薇の花壇……もつとスーパースターやチャールズストーンを植えなくちゃ……そうだ、薔薇の垣根をつくるのも悪くないぞ。(兄にむかって) どうだい、お前、ちよつとしたアイデアだろう、竹であんだ棚だつていい、その薔薇棚につる薔薇を這わせるんだ、白や黄色のつる薔薇をいっぱい……兄 ……(答えない)

父親、夢からさめたように疲れた表情になる。

父親 なんだい、その眼付きは……おお、こわい、なんでわしに腹をたてる、お前がいけないんだ、やりすぎたんだ。ものには限度つてものかおる。だからわしは高のぞみなんてしないんだ。庭だつて、二千坪も三千坪ものぞみやしない、十坪の庭でいい、いや五坪だつて……そこに猫の額ほどの薔薇の花壇がつくれればいい……だから、お前もせいぜいわしの夢に協力するんだな、なーに、大した金じゃない、二人で働けば何年もかかりやしない。兄 いやだね。

父親 いやだつて？

兄 ああ、ごめんこうむるね……おれには奴の面倒を見る義務がある。

父親 どうかしてやがる、まだあきらめないのか。偶像是こわれたんだ、奴の狂った頭のなかでも、お前の偶像是こわれてしまったんだ。

兄 わかつてるさ、よくわかつてる。おれの偶像是こわれた……だからといって奴を見捨てら

れるか。

父親 えらそうな口をたたくな。奴を見捨てられるか？ 誰が誰を見捨てるんだ、本当はお前の方こそ、奴に見捨てられるのをこわがってるんだ。

兄 そうさ、その通りだ、あんたのいう通りだ、おれは奴に見捨てられたくない！

短い沈黙。

兄 (ナイフを見つめながら) たった二分だ…… たった二分、おれはあの時迷った…… コンクリー

トの柱が急に冷たく感じたんだ、どういいうわけか突然ひんやり感じたんだ…… バカげてやがる。あのコンクリートの冷たさがおれの足をひっぱりやがった、あのコンクリートの冷たさが、おれの人生をすべて二分遅れにしやがった…… たった二分！ (くすくす笑い出す) あれが卑劣さの正体だっていうのか、あれが卑劣さの正体…… まるであばずれ女の口からちらつとこぼれる金歯みたいなもんじゃないか…… でなきや、おふくろがおやじの寝床でちらつと見せる愛想笑いみたいなもんだ…… たったの二分…… それもたったの二分…… 気がつくともう奴は走っていた、奴は気狂いみたいに突進していた。…… めちゃくちゃだった、奴は恐怖にひきつっていた…… だからぼくは、だからとっさにぼくは、奴を気狂いにしたてたんだ…… この男は頭がへんなんです。気が狂ってる。気狂いです。精神鑑定を要求します！

詩人 ぼくは拒否します！ ぼくは精神鑑定なんて断固拒否します…… ぼくは決して気狂いなんかじゃない。

父親 お前……

兄と父親、ふりむく。

詩人、いつのまにか、先にあった発作のように、階段の片隅で、きちんとひざをそろえて  
架空の訊問を受けている。

詩人

（首を激しくふる）なぜだかわかりません。にいきさんがなぜそんなことをいうのかぼくにはわかりません……そんなことはにいきさんに聞いて下さい、ぼくはしゃべりたくない、ぼくはなにもしゃべりたくない……ただ一つだけ、もしにいきさんがぼくを救うためにそんなことをいったとしたら、それはあやまりです。それはにいきさんの大きなあやまりだ、それだけをにいきさんに伝えて下さい……（突然低く笑い出す）わかつてますよ、あなたたちのいたいことはだいたいわかっている、気狂いでいた方が有利だといいたいんでしょう。たしかに偽気狂いも悪くない……しかし違うんです。なにが違うって、あなたたちにいう必要なんかない！ これはぼくとにいきさん、二人だけの問題なんだ。二人だけの世界の問題なんだ……もうやめてくれ、あなたたちにわかつてたまるか……ぼくはもうしゃべらない。これ以上話す必要を認めない、おどかしたってだめです。もう時間のムダだ。（あたかも手錠をかけられてるように手をそろえて出し）さ、連れてって下さい。ぼくはひとりになりたいんだ。ひとりになって壁や天井のしみを見つめていたいんだ。だから、連れてって下さい。たのむから早く連れてってくれ！

兄、詩人の背後から優しく手をかける。

兄さ、いこう、今日の訊問はおわりだ……

詩人、立ち上る。  
詩人、ふとあたりを見廻す。

兄 どうしたんだ……

詩人 誰かがぼくを見つめてる……

兄 誰かが？

詩人 そうです、誰かが……

詩人、ふたたび周囲を見廻す。

詩人、驚いたように木々や便所の壁を指さしていく。

詩人 ほら、あそこにも、あそこにも……にも……

暗い木々や便所の蔭に、いつのまにか例の男たちがパンツ一枚の裸の少年たちに変貌し、のぞいている。

しかし、兄と父親には見えないらしい。

二人、キョロキョロ見廻す。

兄 どこだ？ どこに誰がいるんだ。

父親 わしにも見えない……誰も見えない……

兄と父親、そういうながら木蔭や便所の蔭をさまよう。

詩人、少年たちに呼びかける。

詩人 さ、きみたち出てこいよ、そんなところにかくれてないで顔を見せてくれよ……さ、早くぼくのそばに……

裸の少年たち、木々の間から、かすかに白い顔を露わにする。

詩人 そうか、やっぱりきみたちか……ぼくはずっときみたちを捜してたんだ……元気を出せ、なぜそんな青白い顔をしてるんだ。仲間がそんなにいるのになぜ口をきかない……ぼくはずっときみたちをさがしてたんだ。ウソじゃない、ぼくはきみたちがつくる、きみたちだけの薔薇の群島をさがしてたんだ。さあ、気どるなよ、人みしりはするなよ、おい……

詩人、ふらふらと木立ちに近づき、少年をつかまえようとする。と、少年の姿が闇に消える。

詩人 なぜさける。なぜおれをさける。よせよ、薔薇の群島をひとりじめしようたってだめだ。おれだって仲間だ、そうだろう。

詩人、別の木立ちに近づく。

少年の姿が消える。

詩人 おい……

詩人、木々の蔭を追いかける。

次々と姿を消していく少年たち——

詩人、くたびれ果てて、まき散らされている薔薇の中に坐り込んでしまう。

詩人 くそ、手におえない奴等だ。なにが薔薇の群島だ……つめてえ、おお……つめてえ……  
畜生、薔薇がこんなに咲いてるのに、どうしてこんなにつめてえんだ……今は春なのか……それとも冬なのか……

詩人、ふとふりかえると、大便所のドアの蔭になにかが動く。

詩人 おい、そこにかくれてるのは誰だ……

詩人、ドアをパタンとおける。

と、兄がいつのまにかパンツ一枚で少年のように顔を白く塗ってひそんでいた。  
なにか詩人におもねるような弱々しい笑みをたたえて。

詩人 きみ……そうか、きみだけは逃げないでいてくれたんだね、さ、こいよ、こっちへこいよ。

ふと、兄の手にあるナイフに気づく。

詩人 そりゃなんだ、ずい分ぶっそうなモノ持つてるじゃないか。

兄、気づいてあわてて隠そうとする。

詩人 (兄の腕を素早くつかむ) 待て、こっちへ渡すんだ、きみたち少年にはムリだよ、使い方も

ろくろく知らないんだろ、よこせよ、なーに取り上げようってんじゃないんだ、おれが使い方を教えてやろってんだ、ムズかしいことはなんにもない、ただ呼吸が肝心なだけだ、それにきみたちはいつも脇腹を狙うだろ、ありゃよした方がいい、失敗する確率が大きい。狙うんなら首筋だ、(自分の首筋をたたき)ほらここだ、この辺だ……なにをぐずぐずして、さっさとやれ!

詩人、兄の腕を思い切りひきよせる。

ナイフ、詩人の首筋にささる。

鮮血!

詩人、体を回転させると、壁によりかかりながらずるずる崩れ落ちる。

兄 お前……

木蔭から、父親がとび出してくる。

父親 バカ、なんてことを……

二人、かけよる。

兄 おい、にいさんだよ。

父親 パパだよ。

詩人、二人をはねのける。

詩人 誰だ！ 貴様たち！

兄と父親、呆然。

詩人 (冷笑) ヘタな変装はよせつていったら、今日はハタ日か、ハタ日だからおやじと兄貴に変装してんだな、いい加減にしゃがれ、あんまりいろいろ変装しすぎると、今に本当の自分が誰だったかわからなくなるぞ。

父親 お前……

詩人 もういい、ひとりにしてくれ、ひとりになって壁や天井のしみを見つめてたいんだ、とつと失せろ！

詩人、便所の中へころがりこむ。

一瞬の静寂。

ややあって、兄と父親、便所に呼びかける。

兄 おーい。

父親 おーい。

兄 おーい。

父親 おーい。

兄 おーい。

父親 おーい。



もはや、詩人の声は戻ってこない。

長い沈黙。

時折、ヘッドライトの光が浮んでは消える。

父親、不意に、なにかを捜すように自分の体のあちこちをさわりはじめる。

父親 ……ない……ない……薔薇の種子がない……どこで落ちちまったんだろ……また……買わなくちゃ……畜生、こんどは騙されないぞ……たまには気分をかえてピンクのやつを買おう……（この間に、兄、ゆっくり立ち上ると、便所の中へ姿を消す）それとも黄色いピースをつる薔薇にするか……いやいや、シャルル・マルランやスターリング・シルバーも悪くない、……でも小さな庭にはやっぱりつる薔薇がいい、五坪や十坪の庭にはつる薔薇がぴったり。

その時、兄が便所の中から姿をあらわす。その背に荒縄でくくりつけられている詩人の死体……

父親 お前……

兄 さ、出かけるんだ……

父親 出かける？ どこへ。

兄 決つてるじゃないか、新しい別の公衆便所だ。

父親 奴はもう死んだんだ、今さらなにをいい出す。

兄 うるさい！ つべこべぬかすな！ 詩人と時代のむすびつきとは、単なる時代の反映者た

ることではない、詩人の役割とは時代の見えな部分と結びつくことだ、真の時代を発見することだといってもいい。夜は偽れる盛装をする、街もしかり、便所もしかり、かの詩人がいった、満開の桜の木の下には一ぱいの死体が埋まっている、そしてまたまたかの詩人はいった、深夜の公衆便所の下にも一ぱいの死体が埋まっている……

父親 見えすいた芝居はよせ！ そんなことをしてなんになる。奴は死んだんだ、そしてお前は永久に見捨てられたんだ。

兄 バカをいえ、どうしてそんなことがいえる、あなたになんの権利があつて永久に見捨てられたなんていいきれるんだ、奴もいつてたろ、これはおれたち二人だけの問題だ、おれたち二人だけの世界の問題だつて……見捨てたり見捨てられたり……あなたが考へてるほど生易しいことじゃないんだ、だから口出しはやめろ！

父親 バカだ、お前は本当にバカだ、お前は奴を見捨てた。そしてお前は奴に見捨てられた。これ以上なにあるつてんだ……

兄 もうよせ、それ以上しゃべるな。あんたはその辺の薔薇の花壇のなかで眠りこけていろ……

父親 (兄の足にすがりつく) なあ、帰ろうよ、わたしたちの家へ……

兄 黙れ！ 死ね！

父親を蹴つとばす。

薔薇の上のところがって動かなくなる父親。

兄 (詩人の声色) いつだったかよく想い出せない……たしか誰かを待っていた……ぼくはひど

く緊張した……そのうちににいさんが臭いといひ出した……覚えてるだろ、にいさん（兄に戻る）ああ、覚えてるとも、よく覚えてる。（詩人に戻る）でもあの時のにいさんは残酷だった、緊張のあまりウンコをもらしたぼくを河へ突きおとした、このぼくが泳げないことを知りながら……それでもぼくは笑おうとした、ムリして笑おうとした、なぜだかわかるかい、ぼくはにいさんに捨てられたくなかったんだ……（兄に戻る）もうよせ、おれはお前を見捨てたりしなかった、だから今もこうして一緒にいるじゃないか。（詩人に戻る）わかってるよ、にいさんはおれを見捨てたりしなかった……でも誰を待ってたんだろ、あの時、ぼくらは誰を待ってたんだけ……

突然、木立ちや便所の蔭から、

クスクス笑い声。

兄、きつとふりむく。

兄 誰だ、そこにいるのは……奴等の仲間だな……、見ろ、おれたちはもう隠れないぞ、だからそつちも隠れないで姿を見せろ、はつきり正体をさらせ！

兄、木立ちの蔭に突進する。

と、男たちの姿が消える。

兄、別の木立ちに突進する。

と、男たちの姿が消える。

兄、またまた別の木立ちへ、

と、また男たちは消えた。

兄、へとへとになる。

兄 畜生……のどがかわいた……

便所へ入って行って、手洗いの蛇口にかぶりつく。

しかし、水が出ない。

兄、あきらめて便所から出てくる。と、立ち止る。

耳を澄ます。

兄

誰だ泣いてるのは……風か……いや水の音だ……河だ、河が流れてる……くさい、ひでえ臭いだ……きつとくさった動物の死骸が流れてるんだ、猫やら豚やら人間やら……ああ、なんて汚辱に充ちて、華やかな混乱なんだ……とにかく河岸までいこう。構うもんか、おれはのどがカラカラだ、さ、おれにしっかりとつかまるんだ、ふり落されるな、もし無事に河岸へついたらおれたちは舟を出さず、たとえ十月の蝶にも似たか弱い舟でも、おれたちは漕ぎ出すんだ……

兄、闇に河をさがし求めるように客席へおりていく。そして、背に荒縄でくくりつけた詩人の死体とともに、夜の街に消えていく。

と、その時、

一瞬便所の白木の棺桶が灰白く輝く。

と、闇。